

なお、神に叫ぶ

[エゼキエル書 8章 1～13節]

第六年の六月五日のことである。わたしは自分の家に座っており、ユダの長老たちがわたしの前に座っていた。そのとき、主なる神の御手がわたしの上を下った。わたしが見ていると、人の有様のような姿があるではないか。その腰のように見えるところから下は火であり、腰から上は琥珀金の輝きのように光輝に満ちた有様をしていた。彼が手の形をしたものを差し伸べて、わたしの髪の毛の房をつかむと、霊はわたしを地と天の間に引き上げ、神の幻のうちにわたしをエルサレムへと運び、北に面する内側の門の入り口に連れて行った。そこには、激怒を起こさせる像が収められていた。そこには、かつてわたしが平野で見た有様と同じような、イスラエルの神の栄光があった。彼がわたしに、「人の子よ、目を上げて北の方を見なさい」と言ったので、北の方に目を上げると、門の北側に祭壇があり、入り口にはまさにその激怒を招く像があるではないか。彼はわたしに言った。「人の子よ、イスラエルの人々がわたしを聖所から遠ざけるために行っている甚だ忌まわしいことを見るか。しかし、あなたは更に甚だしく忌まわしいことを見る。」

彼はわたしを庭の入り口に連れて行った。見ると、壁に一つの穴があるではないか。彼がわたしに、「人の子よ、壁に穴をうがちなさい」と言ったので、壁に穴をうがると、そこに一つの入り口があるではないか。彼は、「入って、彼らがここで行っている邪悪で忌まわしいことを見なさい」と言った。入って見ていると、周りの壁一面に、あらゆる地を這うものと獣の憎むべき像、およびイスラエルの家のあらゆる偶像が彫り込まれているではないか。その前に、イスラエルの長老七十人が、シャファンの子ヤアザンヤを中心にして立っていた。彼らは、それぞれ香炉を手にしており、かぐわしい煙が立ち昇っていた。彼はわたしに言った。「人の子よ、イスラエルの家の長老たちが、闇の中でおのおの、自分の偶像の部屋で行っていることを見たか。彼らは、主は我々を御覧にならない。主はこの地を捨てられたと言っている。」彼はまた、わたしに言った。「あなたは、彼らが行っている更に甚だしく忌まわしいことを見る」と。

[1] 旧約の神は審く神？

今日の様な聖書の箇所は困ってしまいますね。ひとえに徹底的に厳しい主なる神の言葉が預言者エゼキエルを通して語られています。ここに見ることが出来るのは、決して優しい神様ではありませんね。怖い神様、人間に対して容赦のない神様、審かれる神様像が迫ってきます。私たちが普段聖書からイメージして

いる神様は、審く神様というより、私たちを受け入れて下さる神様、私たちは弱い存在だけれども、そんな私たちをどこまでも愛して下さる神様を思い描いていることが多いと思います。もちろんそれは間違っている訳ではありません。それでは、今日のような聖書の箇所をどのように捉えたら良いのでしょうか。

今日の箇所（エゼキエル書 8 章全体）でテーマとなっているのは「**偶像礼拝**」ということです。偶像礼拝とは、真（まこと）の神以外の存在を神とするということで、それは言い換えれば自分の都合の良い神を作るということです。

今月は「平和月間」でもありますけれども、かつての日本も「神国日本」と言ってアジア太平洋地域にとんでもないことをしたわけですが、これは美しい理想なのだ、神のみこころなのだという、神ならぬ神を仕立てた偶像礼拝と結びついていたと言うことが出来ると思います。かつての日本のキリスト教会もある意味それに積極的に加担してしまっただころがあるのですね。そのことを本当に悔い改めたのは戦後随分経ってからだと言うことが出来るのです。

[2] 偶像は自分を見失わせる

イスラエルの国も、今まで神様は自分たちの味方であったのに、国がある意味滅ぼされ、バビロンに捕え移されるという事態を経験し、今日の 8 章 12 節で「(人々が)主は我々を御覧にならない。主はこの地を捨てられたと言っている」と神様が言っているように、もうこんな仕打ちをする神様であるなら、そんな神はいらない、もっと私たちに良い思いをさせて下さる神様、豊かにさせて下さる神様、誇りを持たせて下さる神様を神様にしようという思いがあったということが分かります。ここの所は大事な部分だと思います。もし私たちが、ただ自分を喜ばせるためとか、誇らしい気持ちになるためだけに信仰を持っているとするならば、それは**都合の良い神＝偶像礼拝**をしていることと何ら変わらないことではないのでしょうか？

エゼキエル書ですが、しばらくは厳しい審きの言葉が続くのですね。これは、一面神様は**筋を通されるお方**であるということ、また**人格をもっておられる**ということ。8 章では、4 つの事柄に偶像礼拝を糾弾しています。3 節には「**激怒(ねたみ)を起こさせる像**」とあります。10 節には壁の穴を通して見える（つまり隠されている）所に、あらゆる偶像が彫り込まれていたとあります。また、14 節には女たちがタンムズ神（バビロンの神）のために泣いている様子が描かれ、16 節以下では、神殿の恐らく祭司たち 25 人が太陽神を拜んでいるということが暴露されています。主なる神様はこれについては黙っていられなかったということが分かります。それこそ神様は「**激怒**」を起こされたのです。主は人間のために喜

び、また人間のために苦悩し、また怒る、そのような人格をお持ちの方です。

主イエス様も「激怒」された場面がありますね。あの宮きよめの出来事です。(マタイ 21:12~13)「あなたは祈りの家(神殿)を強盗の巣にしてしまった」と叫ばれて、両替の台や鳩などを売る者たちの椅子を引っくり返したとあります。「偶像礼拝」というのは旧約も新約も同じです。それは自分の「願望」を神とすることです。神様を「利用」することであります。その反対が**立ち帰ること、「悔い改める」ということ**です。8月は特に悔い改めの月間でもあります。

神様がエゼキエルに言われた言葉の中に「**彼らは主は我々を御覧にならない。主はこの地を捨てられたと言っている**」という言葉がありました(12節)。これはある意味、民の悲しみの現れです。もう自分たちを神様は見ておられない、捨てられたに相違ない、と。私たちも思わずそのように呻いたりつぶやくことがあるのではないかと思います。大きな災害や試練の時にはそんな声が必ず挙がります。…けれども大事なことは、**その呻きやつぶやきを聞いておられる!** ということだと思います。**聞いておられるから**このような言葉が出てくるのです。神様は、生きておられるのです! ただ私たちの理解を超えているだけなのです。もし私たちの理解に留まるお方であるなら、それは神様ではありません。それが「偶像」なのです。「偶像」に引っ張られると私たちは自分を見失うのですね。

[3] 命の叫び、命の祈りを!

榎本保郎牧師の『一日一章』の今日の箇所にもこのような文章がありました。

「エルサレムに残った人たちは、**神が見捨てられた所を神がご覧になるはずはないと思っていた。ここに、現実から神を見ようとする態度がある。しかし、信仰というものは、神から現実を見る態度である。こんな不幸なことがある、こんな矛盾がある、こんな悪がある、この地上のどこに神があるのか**と言う人があるが、**私たちは現実がうまくいっているから神を信じているのではない。私たちが神を信じるのは、イエス・キリストを私たちに送って下さった、イエス・キリストにおける神を信じるのである。イエス・キリストの父なる神から現実を見ていくのである。神はそのひとり子を賜うほどに私たちを愛された(ヨハネ 3:16)のである。**」

この、目線を変える、ということがとても大事なことなのだなと思いました。順境の時は神様が味方し、逆境の時は神様に捨てられたと私たちは言いやすいですね。けれども、神様が人間を捨てたのではなく、人間が神様を捨てたのです。でもその人間の、神様に対する言葉を神様はみんな聞いて下さっているの

です。フォーサイスという有名な神学者は『祈りの精神』の初めの所で、「**最悪の罪は祈らないことである**」と書いています。神様は私たちの声を聞いて下さっているのです。その証拠に、神様はこの後約 600 年経って**イエス・キリスト**を私たちの世界に遣わされました。主イエスというお方は、神様が呻きの末に、これ以外に人間が救われる道はないと、私たちと連帯される神様、罪人である私たちを赦し、その赦しの中に新しく造り変えて下さる神様であるのです！。

今この季節、蝉しぐれ、蝉の鳴き声が凄いですよね。なぜ蝉は鳴くのでしょうか。鳴くのはオス蝉だけだそうです。やっと地上に出た蝉は短い生命の中で、自分の居場所を知らせるのだそうです。そうするとメス蝉がやってきて、自分たちの子どもを宿すという使命を果たす。言い換えれば、彼らの短い命は、次の世代のためにある。そのために「私はここにいます」と懸命に知らせている。

私たちも、心の中ではオス蝉のようであつたらよいのではないのでしょうか？「私は今ここにいます。私を知って下さい」。命の叫び、命の祈りと言っても良いと思います。エゼキエル書は厳しい言葉が連なっています。けれども、それは、**私のもとに立ち帰って来なさい、という神様の呻き、祈りと言ってもいいと思うのです**。神様の心は、私たちのために激しく、激怒、嫉妬するほどに熱く動いているのです。私たちは罪人以上にはなれない弱い存在です。あの**マルチン・ルター**の言葉を思い起こします。—「**罪人であれ。大胆に罪を犯せ。しかし、さらに大胆にキリストを信じ、神を喜びたまえ**」。

私たちは、蝉の命にも勝る**神の命、永遠の命**の約束を頂いていることを感謝し、今この時、主を待ち望んで生きてゆきたいと思います。

お祈り致します。